

■ 書 評 ■

神経内科プラクティカルガイド

栗原照幸 ● 著

名古屋大学名誉教授・神経内科 高橋 昭

本書は、1987年以来、名著として改版や増刷を重ねてきた『神経病レジデントマニュアル』を全面的に改訂増補した書である。本書について語るとき、先生のご経歴を素通りすることはできない。

著者の栗原照幸先生は、1967年に慶應義塾大学医学部を卒業、米国ECFMG（外国人医師卒業教育委員会）試験に合格、ワシントン大学バーンズ病院でインターン、神経内科レジデント。神経生理学リサーチフェロー、宮崎医科大学神経内科学助教授（教授：荒木淑郎先生）、東邦大学内科教授を経て、現在東邦大学名誉教授、神経内科津田沼で神経内科の実地診療に従事しておられる、日本を代表するベテラン神経内科医の一人である。米国の医学教育システムを日本に紹介、日本神経学会では卒後教育委員として医学教育、特に卒後の研修に情熱をもって当たられ、現在の専門医制度の導入に大きな力を発揮された。

このようなご経歴の持ち主の栗原先生が、長年にわたる神経内科の実地診療のご経験を基にまとめ上げられたのが本書であり、上記の前身の書から25年以上の歴史が光る。神経内科学を学ぶに当たっての栗原先生の信条は、本書の第1章に詳述されているので、まずはこの章を熟読してほしい。

本書は症候学や診断手法の詳細を記した一般の神経内科診断学書では

ない。「神経学的診察」の章では、むしろ簡潔に診察の要点が述べられ、これに対して「問診」の比重が大きく、神経疾患の診断にはベッドサイドの診察とともに問診が重要であることが強調され、その具体的な指針が述べられている。

「神経学的診察」の章では、多くのオリジナルの写真と図を用いられ、初心者や学生にとっても理解しやすいあたたかい配慮が随所に見られる。

神経疾患患者の診察への第一歩は神経症候の理解と分析である。このことから、日常多く経験される主要な神経内科領域の common symptom や徴候として、意識障害・昏睡、頭痛、てんかん、めまい、認知症、不随意運動、便秘・排尿障害などの自律神経障害がそれぞれ独立の章として記述され、実際の診療に大変有用である。さらに、本書の大きな特徴は、これらの症候の治療の要点が的確かつ簡潔にまとめられていることである。例えば「不随意運動」の章では、まず概要の項で診察の仕方と発症機序などがまとめられ、それに続く項では、主要な不随意運動の治療の要点が述べられている。この著述方針は本書の基本をなすものであり、これら以外の神経疾患についても治療に主眼が置かれている。このため、読者は実際の治療に際し、本書をひもとけば、診断や治療の指針が得られる。また各薬剤



の、有害事象、薬価、保険点数の問題点にまでも言及されており、患者の経済的負担を考慮して診療に当たるように警鐘が鳴らされている。これらは類書に見ることができない本書の特徴である。

日常診療で最も多く直面する「脳血管障害」「認知症」「パーキンソン病」の章では、最近の治療法の利点欠点をご自身の長年にわたる豊富な経験や考え方に立脚して記されており、参考になる点が多い。

「神経・筋疾患」の項は、栗原先生のご専門が発揮された圧巻ともいえる内容である。重症筋無力症、多発性筋炎、周期性四肢麻痺などは、特にその感が強い。

付録として、ベッドサイドの診察に加えて、電気生理学的検査、画像診断の解説があり、これらへのアプローチと診断の有用性が述べられている。

座右の書として診察室に常備されることをお勧めしたい。

A5・頁408 2014年

定価：本体4,300円＋税

[ISBN978-4-260-01893-7]

医学書院刊